

「なっちゃんは、ほっとけない」 第1話

水瀬真理佳

		へ登場人物へ	
		本田夏海（16）	本田家の長女、高校2年生
		本田冬馬（13）	本田家の長男、中学2年生
		本田春樹（8）	本田家の次男、小学2年生
		本田秋悟（39）	亡き夏海たちの父親
		本田七海（38）	亡き夏海たちの母親
		西山凜（16）	夏海のクラスメイト
		藤井拓海（16）	夏海のクラスメイト
		橘龍太郎（16）	夏海のクラスメイト
		佐野聖也（16）	夏海のクラスメイト
		中村康太（36）	夏海の担任
		小勝由利（30）	養護教諭
		澤村千恵（60）	弁当屋の店主
		小林（16）	夏海のクラスメイト
		佐藤（16）	夏海のクラスメイト
		三上（17）	他クラスの生徒
		渡辺（43）	コンビニの店長
男性客			
警察官 1			
警察官 2			

○マンション・全体（朝）

中層マンションの外壁に朝日が当たっている。

○同・本田家・キッチン（朝）

長女・本田夏海（16）、制服にエプロン姿で野菜を切る。

コンロで煮たっている鍋の蓋を開けると、中にはつゆに浸った牛肉と玉ねぎ。スプーンで汁をすくって味見。

夏海「うん。いい感じ」

壁掛けの時計は7..00ちょうど。

○同・本田家・廊下（朝）

夏海、廊下の両脇にある部屋をそれぞれノックしてドアを開ける。

夏海「冬馬！春樹！7時だよ！」

○同・本田家・冬馬の部屋（朝）

長男・本田冬馬（13）、スッと起き

上がるが目は開いていない。
大きくあくびをしながらベッドを出る。

○同・本田家・春樹の部屋（朝）

次男・本田春樹（8）、ピクリともしない。

春樹「まだまだやれるし……」

と、寝言を言う。寝相が悪い。

○同・本田家・リビング（朝）

制服を着た冬馬と眠そうな春樹が並んで椅子に座る。

それぞれの前にはトーストやサラダがワンプレートになって置かれている。

冬馬「いただきます」

と、手を合わせる。

春樹、ウトウトしながらトーストをかじる。

冬馬、春樹の様子をチラッと見て、

冬馬「春樹、寝癖ついてるぞ」

春樹「へ眠そうに」わざとだし」

夏海はテーブルの上で市販の弁当の中
身を空の弁当箱に移す。

冬馬「夏海、朝ごはんは？」

夏海「作りながらつまんじやった」

弁当箱を閉め、今度は洗い物を始める。

冬馬「俺やるからいいって」

夏海「ありがとー！でも大丈夫大丈夫」

春樹「ねえちゃん新しいせいふくだ！」

夏海「そう！今日から新しい学校だからね」

春樹「へえー！」

冬馬、申し訳なさそうに夏海を見る。

夏海「食べたからお皿ちょうだいね」

○同・本田家・和室（朝）

仏壇の前に正座する夏海と冬馬。

父・本田秋悟（39）と母・本田七海
（38）の写真が並ぶ。

春樹は座らず、

春樹「お父さんお母さん行ってきまーす」

と、走って部屋を出る。

冬馬「おい春樹！」

夏海「車に気をつけてよー！」

夏海が仏壇のリンを鳴らして手を合わせる。冬馬も手を合わせる。

夏海「（目を瞑って）お父さん、お母さん。

兄弟三人、今日も元気に行ってきます」

夏海、立ち上がった時に靴下の穴に気づく。右足の親指が見えている。

夏海「あ……」

夏海、両足の靴下を脱いで丁寧に畳む。

。 4

○同・本田家・玄関（朝）

冬馬が家を出るを見送る夏海。

冬馬「なあ。やっぱり西高戻んなよ」

夏海「もうその話は終わり。西高はね、二年からは朝も早く行って勉強だし、放課後も授業があるんだよ？ 私大学行かないし、意味ないもん。そんな勉強したくない」

冬馬「夏海は勉強好きだし、できるじゃん！

大学も絶対行くべきだと思う。母さんたちだって絶対そう言うに決まってる！」

夏海「それに私、西高よりこっちの制服の方が好きなんだよね。似合ってるでしょ？」

と、くるくる回ってスカートをなびかせる。

冬馬「入谷高って、底辺の人間が行くヤンキー高校だよ。共学なのに女子はいない。なんで分かる？ それくらいガラ悪いんだよ」

夏海「そんな言い方しない！ ヤンキーはね、私みたいな地味で面白くない人間には興味ないから」

冬馬「ヤンキーのこと何も知らないくせによく言うよ」

夏海「（ドヤ顔で）今春樹と見てるドラマにヤンキーが出てくるの」

冬馬、大きなため息をつく。

冬馬「……マジで心配なんだけど」

夏海「大丈夫。教室の隅で大人しく過ごすか

ら。ね？」

冬馬「スマホ貸して、今の録音するから」

と、手を出す。

夏海「そこまでする！？ 私ってそんなに信

用ない！？」

冬馬「（当たり前のように）世話好きな夏海

が、黙ってじっとしてられるわけないし」

夏海「（口を尖らせて）そんなことないもん

：：あ、そうだ。冬馬今日部活だよ。冬

馬の好きな牛丼作っておいたから。帰った

らあっためて先に春樹と食べててね」

冬馬「：：うん。ありがと」

夏海「ほら、遅れるよ」

冬馬「：：行ってきます」

夏海「行ってらっしゃい」

ドアが閉まって、

夏海「私も準備しないと」

○商店街・通り（朝）

それぞれの店先で準備をしている店主

たちが「おはようなっちゃん」「行っ
てらっしゃい」と夏海に声をかける。

夏海「おはようございます！ 行ってきました！
す！」

と、手を振りながら自転車で通過。

○入谷高校・全体（朝）

建物のシミが目立つ古い校舎。
ただならぬ空気が流れている。

○同・駐輪場（朝）

錆びついた自転車が二、三台重なり合
って倒れ、隣に派手なバイクが止まっ
ている。

夏海、自転車を止め、倒れている自転
車を一台ずつ起こす。

中村「本田さん！」

と、担任・中村康太（36）が走って
くる。

夏海「中村先生！ おはようございます！」

中村「おはよ。そんなのほっといていいから」

夏海、倒れていた最後の自転車を起こして、

夏海「今日からよろしくお願いします！」

中村「：：本当にいいのか？」

夏海「はい！」

中村「気持ちには変わらなかった？」

夏海「変わってません！」

中村「分かった：：ようこそ、不良のジャン

グルへ」

夏海、ワクワクした表情で校舎を見上げる。

○同・2年A組（朝）

教室内の壁や黒板の至る所に落書き。

机は十ほどこなく、全体的に後方に

寄せられてぐちゃぐちゃに並ぶ。

空のペットボトルや菓子のゴミ、誰の

ものか分からないTシャツ、コミック

誌や青年誌などが散乱。

派手な髪色で制服を着崩した生徒たちが会話したりゲームをしたり各々自由に過ごし、騒がしい。

中村「ちゅーもーく」

中村が教卓で話し始めても見向きもしない。中村、気にせず続ける。

中村「今日は転校生紹介するから」

夏海、凜とした佇まいで中村の横に並ぶ。

騒がしかった教室が一瞬で静まり、クラス全員が夏海の方を見る。銀髪の西山凜（16）、いちごミルク味の棒付きキャンディを咥えたまま一瞬夏海を見るが、すぐにやっていたジグソーパズルの続きに戻る。

中村「じゃあ簡単に自己紹介を」

夏海「初めまして。今日からこのクラスでお世話になります、本田夏海です。よろしくお願ひします！」

中村「というわけだ。お前らくれぐれも手出

すんじゃねーぞ」

小林「前の学校で何やらかしたんですかあ」

佐藤「なんカップ？」

クラスメイトの小林（16）と佐藤

（16）が好き勝手に質問する。

中村「本田さん、シカトしていいから」

しかし夏海は気にせず答え始める。

夏海「前の学校で問題を起こして転校したわ

けではないので安心してください。それか

らはマグカップです！」

一瞬教室が静まり、すぐに笑いが起き

る。

佐藤「マグカップってなんだよ」

小林「大きいのか小さいのかわかんねえ」

しかし夏海はなぜ笑われているのか分

からずとりあえずニコニコしている。

教室の後方では、

聖也「やべえ。オモロいやつ来た」

と、オレンジ髪の佐野聖也（16）が

ケラケラ笑う。

龍太郎「天然すぎだろ」

と、唇にピアスをした橘龍太郎（1

6）が感心する。

文庫本を読んでいた藤井拓海（16）

は失笑して読書に戻る。

凜は難しい顔をしてジグソーパズルの

ピースを探している。

中村、頭を抱える。

○同・2年A組（休み時間）

後方の席で、

龍太郎「俺ちよっと話しかけてこよーっと」

聖也「オレもー」

と、立ち上がる。

拓海「怖がらせんなよ」

と、二人を見送る。

凜はジグソーパズルに夢中。

龍太郎と聖也、教卓の前の席に姿勢よ

く座る夏海を囲む。

龍太郎「なあ、西高行ってたんだろ？　なん

でうちなんか来たんだよ優等生ちゃん」

聖也「いじめられたとか？」

夏海「西高だとバイトの時間が限られてしま

うので転校しました」

龍太郎「えらく！金稼いで何に使うん？」

聖也「アイドルだろ！それかホスト！」

夏海「うちは食べ盛りの男の子が二人もいる

ので、何かと物入りで」

龍太郎「ブフッ。物入りって」

聖也「子どもいんの！？意外とやることや

ってんなー。何歳！？」

思わず本音が漏れた聖也の頭を龍太郎

が軽く叩く。

夏海「あ、いえそうではなくて」

夏海が説明しようとする、廊下が騒

がしくなる。

他クラス、他学年の生徒たちが教室の

中を覗き込んでいる。

龍太郎「すっかり人気者だな優等生」

夏海「私ですか！？」

聖也「そりゃあ、この学校ゆいつの女子だし。
確か百年ぶりくらい？」

夏海「この学校って去年創立五十周年じゃ：

：

聖也「そうなん？　　すげーな、そんなことも

知ってんの！」

夏海、苦笑。

龍太郎、廊下を見ながら、

龍太郎「これじゃあ中村も入ってこれねーな」

○同・廊下（休み時間）

2年A組前の廊下いっぱいの人だから
ができています。

中村「テーマーラ何してんだよ。ほらどけ。入
れねーだろ」

と、カラフルな頭たちを出席簿で叩く。

○同・2年A組（休み時間）

夏海「私、道を開けてもらうように頼んでき
ます！」

と、勢いよく立ち上がる。

聖也、両手を広げて夏海の前に立ちは
だかる。

聖也「いーじゃん別に。授業なんて誰も聞か

ねーし」

夏海「私は聞きたいです！」

その時、後方で机が吹っ飛ぶ音がする。

夏海、ビクツとして後ろを振り向く。

凜が机を廊下に蹴り飛ばしたおかげで

廊下に空間ができる。

三上「お前が西山だな」

と、扉のそばに他クラスの三上へ 1

7 が立ちはだかる。

凜、啞えていた棒付きキャンディを口

から出して、

凜「……誰だテメエ」

三上「フツ。俺はな、三年の鎌田さん率いる

黒龍会で、」

凜、三上の話の途中で、

凜「……どけよ」

しかし、三上も引き下がらない。

三上「鎌田さんが直々にオマエをご指名だ。

ありがたく思うんだな」

凜、再び三上の話の途中で、

凜「……どけつつたろ」

と、三上の腹を膝で蹴り上げる。

三上、腹を押さえて廊下に座り込む。

凜、キャンデイを咥えながら教室を出

て、空間ができた廊下を歩いていく。

中村「西山あー！ 机戻してけえー！」

という怒号が廊下中に響く。

教室内では「西山スゲェ」という声が

上がる。

龍太郎「黒龍会に凜のこと勧誘しにきたんか」

聖也「ムダムダ。凜は自分が認めたヤツしか

キョーミねーもん。鎌田のことなんて多分

名前も知らねーよ」

夏海、目をパチパチさせて、

夏海「今の方は……？」

龍太郎「アイツは西山凜。この辺の不良の中

じやかなりの有名人」

聖也「入谷の白（しろ）トラって呼ばれてんだぜ」

龍太郎「白（しろ）トラじゃなくて、白虎（へビヤッコ）な」

夏海「白虎……」

聖也「それぞれ。この学校で凜に勝てるヤツはまずいないな。まさに絶対王者！」

夏海「（真剣に）なるほど……つまり西山くんは生徒会長みたいな存在なんですね」

聖也、教卓を叩きながら爆笑する。

聖也「アハハハっ生徒会長って。あゝ腹痛エ」

龍太郎「（楽しそうに）まあ優等生語だとそうなるかもな」

聖也「凜が本気でキレたらマジヤバいから。

怒らせないようにな、優等生」

その時、拓海が二人を呼びに来る。

拓海「龍、聖也。行くぞ」

龍太郎「ん。（夏海に）じゃあな」

聖也「じゅぎょー頑張れよ」

と、凜を追って教室を出ていく三人。

夏海「行っちゃった……」

中村「すまんすまん。授業始めるぞー」

と、入ってくる。

夏海「お願いします！」

と、嬉しそうに教科書とノートを開く。

夏海の後ろでは、話したりスマホを見

たり眠っている生徒たち。

授業もお構いなしに、教室を自由に出

入りする者もいる。

○同・2年A組

校舎内にチャイムが鳴り響く。

中村「じゃあ今日はここまで」

夏海「ありがとうございます」

中村「本田さん、昼持って来てる？」

夏海「はい」

中村「じゃあ食べるところ案内するわ」

夏海「ここじゃないんですか……？」

中村「こんなところに置いとけねえから！」

夏海、首を傾げる。

○同・保健室

中村、扉をノックする。

由利の声「どうぞ」

白衣の下にミニスカートを履いた養護

教諭・小勝由利（30）が迎える。

夏海「こんにちは」

由利「あなたが転校生ちゃんね」

夏海「2年A組の本田夏海と申します！」

由利、じっと夏海を見つめて、

由利「やだ、超可愛いくなっちゃんって呼ん

でいい？」

と、夏海を思いっきり抱きしめる。

夏海の顔が由利の胸に埋もれて真っ赤

になる。

中村、夏海から由利を引き剥がす。

中村「教室よりは安全……だよな？」

と、釘を刺すように由利を睨む。

由利「あつたりまえでしょ！ あんな猛獣だ

らけの所と一緒にしないで。なっちゃんこそ座って。一緒にお昼にしょ」

由利、中村をしつしつと追い払う。

夏海「お邪魔します……」

由利「私は小勝由利。みんなからは由利ちゃんって呼ばれてる」

夏海「へ嬉しそうに」由利ちゃん先生」

由利「早速囲まれたんじゃない？　大丈夫？

この学校、不良のジャングルだから」

夏海「確かにちよつと見た目が怖い人は多いですけど、みなさん優しいんです。朝もクラスの方が話しかけてくれて」

由利、目を潤ませて夏海を見る。

由利「なっちゃんって見た目通り、ほんとに心が澄んだいい子なんだね」

夏海「へ笑いながら」そうですか？」

由利「訳ありの環境で育ってきた奴も多いからさ。強くないと食われると思って、虚勢張ってるところもあんだよね。根は悪い奴らじゃないし、意外と可愛いところあんのよ」

夏海、頷きながら話を聞く。

由利「困ったことあったらいつでも相談にき

な。もちろん、ただ遊びにくるのも大歓迎」

と、ウインク。

夏海「へ笑顔で」はい！」

○同・2年A組

壁掛けの時計は15..10。

夏海、教室の後ろにある掃除用具入れ

からほうきを取り出し、一人で教室の

掃除を始める。

夏海「あの！」

と、コミック誌を読んでいる佐藤に声

をかける。佐藤の席の下や周りにはゴミ

で溢れている。

佐藤「あん？」

夏海「すみません。ここを掃きたいので、少

し移動してもらってもいいですか？」

佐藤「ムリい」

夏海「では、ここはお願いします」

と、ほうきを渡す。

佐藤「随分チョーシ乗ってんなぁ転校生」

と、立ち上がる。

夏海「あ、じゃあそのままこっちにお願いし

ます。机の下掃いちゃいますね」

と、佐藤の座席の下をほうきで掃こう

とする。

佐藤「ここはオレの席なんだよ。勝手なこと

すんな！」

と、怒鳴る。

夏海「教室はみんなの場所です！」

佐藤「んだとこのヤロー！」

夏海と佐藤が睨み合う。

凜「……ピーピーうっせえーな」

と、凜が教室に入ってくる。

その後ろには拓海、聖也、龍太郎。

佐藤「……コイツがふざけたこと言うんだ

よ！」

夏海「ふざけてなんかいません！」

佐藤「テメェいい加減にしろよ！」

しかし夏海は怯まない。

凜、夏海の前にやって来て手を出す。

凜「……いくら？」

夏海「え？」

凜「言う通りにしたらいくらくれるの？」

夏海「お金は払えません」

凜「人にも頼むなら、その対価は払っても

らわねーと。世の中ギブアンドテイク。金

が無理なら別の方法でもいいけど」

と、夏海の胸元のリボンに手をかけて

顔を近づける。

夏海、咄嗟にギュッと目を瞑る。

凜、フツと笑って、

凜「なに。キス、されと思った？」

と、夏海の耳元で囁く。

夏海「っ……！」

と、顔を真っ赤にして耳を押さえる。

夏海「思ってません！　そもそも、自分たち

が使っている場所を掃除することに対価を

求めるのはおかしいと思います」

拓海「（小さく）言うねえ」

と、口角を上げる。

龍太郎と聖也は声を殺して爆笑。

他のクラスメイトはヒヤヒヤしながら

見守る。

凜「それはオマエのエゴだろ。俺らに押し付

けんなよ。ここじゃあ、いい子ちゃんアピ

ールしたって点数稼ぎになんねーぞ」

夏海「別にそんなつもりじゃ……！」

中村「あれ、本田さんまだ残ってたの？」

と、顔を覗かせる。

夏海「すみません、教室の掃除が終わってな

くて……」

中村「掃除なんていいよ。週に一回は掃除の

おぼちゃんくるから。それより早く帰りな。

バイトあるだろ？」

夏海、時計を二度見する。

夏海「すみません、失礼します！」

と、ほうきをしまい、小走りで教室を

出て行く。

凜、夏海が出て行った扉を見つめる。

○ さわむらキッチン・店の前（夜）

通りの一角の弁当屋。

軒先には「さわむらキッチン」と。

立て看板にはおすすりメニューの写真が貼ってある。

○ 同・店内（夜）

夏海、店のロゴが入った黒いキャップをかぶり、エプロンを着てレジで接客。
ビニール袋に入れた弁当を客に渡して、

夏海「ありがとうございます！」

後ろの厨房から店主・澤村千恵へ6

0 が顔を出す。

千恵「なっちゃんお疲れ。もう看板とってきてくれる？」

夏海「はい！」

× × ×

夏海、看板の写真を剥がし、日付を書

き換える。

千恵「今日コンビニの方は休み？」

夏海「今日は休みにしました。でも明日から

バリバリ働きます！」

千恵「あんまり無理しちゃダメよ。ほら、残

ってる弁当持って帰っていいからね！」

夏海「ありがとうございます！」

○マンション・本田家・リビング（夜）

夏海「ただいま！」

冬馬と春樹「おかえり！」

キッチンでは冬馬と春樹が洗い物をしている。

夏海「ありがとう二人とも」

と、後ろからハグ。

春樹「ねえーちゃんやめろってー」

と、体をよじる。

すると、洗濯が終わった音がする。

夏海「もしかして洗濯も回してくれたの？」

冬馬「俺が干すから。夏海は風呂入ってきた」

夏海「いいのいいの。ありがとね」

冬馬、小さくため息をつく。

× × ×

夏海、物干しスタンドに洗濯物を干していく。冬馬もそれを手伝う。

春樹は宿題をしながら、

春樹「ねえちゃん。オレくつつさくなっ

た！新しいのほしい！CMでやってる

あのカッコいいやつ！」

冬馬「（睨みながら）なんでこの間の誕生日の

時言わなかったんだよ」

春樹「だってたん生日はゲームほしかったし」

夏海「まあまあ冬馬落ち着いて。靴は日用品

だから、プレゼントとは別枠だよ」

春樹、冬馬にあっかんべえとする。

冬馬、イラつとした表情。

夏海「商店街の靴屋さんにあるかな？」

春樹「あそこにはぜったいない！」

夏海「じゃあ久しぶりにみんなでショッピング

グモール行こっか」

春樹「イエーイ！」

冬馬、呆れた顔で春樹を見る。

○同・本田家・リビング（深夜）

夏海、靴下の穴を直している。

冬馬「夏海」

夏海「冬馬。まだ起きてたの？」

冬馬、茶封筒をテーブルに置く。

中には一万円札が入っている。

冬馬「ごめん、少しだけど。これで夏海の必

要な物とか欲しい物買って」

夏海「ありがとう。気持ちだけもらっとくね」

と、封筒を冬馬の方に戻す。

しかし冬馬も夏海の方へ戻して、

冬馬「夏海は自分のこと後回しにしすぎ！

まだ高校生なんだから、部活したり友達と

遊んだり、もっと自分を優先しろよ！ 家

事だってもっと俺やれるから！ バイトも

しなくたって、母さんたちの金もあるだろ。

足りない分は中学卒業したら俺が働いて稼

ぐから！」

夏海「ありがとう、冬馬。でもやっぱりこれはもらえない」

と、冬馬の手に封筒を持たせる。

冬馬「不満そうに」どうせそう言うと思った」

と、大人しく受け取る。

冬馬「学校はどう？　うまくやれてんの？」

夏海「それが聞いてよ。教室がすっごい汚いから掃除しようとしたら断固拒否されてね。

じゃあ自分でやってって言ったら、それも嫌だって言うんだよ？　やってほしいなら

お金払えとか言う人もいて。もう信じらない。ひどいでしょ？」

冬馬「鬼の形相で」信じらないのは夏海だから！　教室の隅で大人しくしてるって言

ったじゃん！　何してんのマジで！」

と、説教が始まる。

夏海、説教を受けながら頬が緩む。

冬馬「なあ、ちゃんと聞ってる？」

と、睨む。

夏海「聞いてるよ。冬馬がしっかりしてるから、ほんと助かるなーって」

冬馬「うん。何も聞いてないってことが今分かった」

と、手で顔を覆う。

○住宅街・道（早朝）

夏海、自転車を走らせる。

辺りはまだ薄暗い。

○さわむらキッチン・店の前（早朝）

夏海、看板を出してメニューの写真を貼り付ける。

○同・店内（朝）

サラリーマンやOL、学生がレジに並ぶ。

夏海、ひたすら接客を続ける。

夏海「ありがとうございます。行ってらっしゃい！」

と、につこり笑って見送る。

千恵「なっちゃん8時だよ」

夏海、エプロンを脱ぎながら、

夏海「千恵さん行って来ます！　また夕方

に！」

千恵「行ってらっしゃい！　気をつけてね」

○坂道（朝）

夏海、全速力で立ち漕ぎして坂を上る。

○入谷高校・2年A組（授業中）

真面目に板書する夏海。

後方の生徒たちは喋ったり好き勝手している。

聖也は鼻いびきをかいて寝ている。

龍太郎は聖也の頬に落書きをして楽しむ。

拓海、龍太郎の落書きを見てクスクス笑い、読書に戻る。

凜は棒付きキャンディを咥えながらジ

グソーパズルに夢中。

水着姿のセクシーなグラビアアイドル
の写真が出来始めている。

○坂道（夕方）

坂道を自転車で颯爽と下りる夏海。

○さわむらキッチン・店内（夕方）

買い物中の主婦や学生がレジに並ぶ。

夏海、ひたすら接客を続ける。

夏海「ありがとうございます。お気をつけ

て！」

と、にっこり笑って見送る。

○レジャー施設・ボウリング場（夕方）

凜がボールを持ってレーンに立つ。

狙いを定めてボールを投げる。

ボールが転がる間、

聖也「はずれろはずれろはずれろおー！」

と、懇願する。

拓海はじっと見守る。

ボールが当たり、ピンが全て倒れる。

凧「ガッツポーズして」っしや」

聖也「ああ」

と、崩れる。

拓海「まだまだこっからだろ」

と、聖也の背中を叩く。

龍太郎「うえーい。ナイス凧」

龍太郎、凧とハイタッチする。

○さわむらキッチン・店の前（夜）

夏海「お疲れ様でした！」

と、扉から出てくる。

自転車で走り出す。

○レジヤ―施設・外（夜）

聖也「じゃーなー！」

凧「おー」

凧は拓海、龍太郎、聖也たちとは反対

方向へ進む。

○コンビニ・店内（夜）

若い男性客がレジにくる。

男性客「：：21番」

夏海「21番ですね。身分証をお願いします」

男性客「：：そんなの見せたことねえよ」

夏海「すみません。ご協力をお願いします」

男性客「チッ。今は持ってねえ」

夏海「では取りに帰られますか？」

男性客「ふざけんな！確認しなくたってど

う見ても成人だろうが！」

夏海「（毅然と）ご協力いただけない場合は

警察を呼ぶことになります。が：：」

男性客「お客様が買うつつつてんだから柔軟

に対応しろよ！　　ったく使えねえ店員だ

な！」

夏海、レジ周りを見て、

夏海「えっと：：代わりにこちらはいかがで
しょうか」

と、レジ横にあるいちごミルク味の棒
付きキャンディを差し出す。

男性客「あ？」

夏海「最近入荷した新フレーバーなんです」

男性客「なあ、ふざけてんの？」

と、レジ台を強く叩く。

ビクツとする夏海。

男性客「誰が飴なんて食うか！　いらねえ

よ！」

と、夏海の手からキャンディを奪い取り、後ろに向かって放り投げる。

それをキャッチする音。

凜「……つぶねえな」

男性客「ああん？」

と、振り向く。

凜「……タバコ買えねえお子様はさっさと帰

ってねんねしろよ」

男性客「んだとクソガキ！」

と、凜に詰め寄り胸ぐらを掴む。

凜、即座に男性客の腕を後ろに捻り上

げ、床にうつ伏せにして制圧。

その上にドカッと座って、

凜「（本気の声で）さっさと失せろ。（男性の耳元で）それとも、一生ねんねさせてやろうか？」

男性客「……（凜と夏海を睨んで）覚えてろよ」

と、凜の下から抜け出し、走って店を出て行く。

夏海「ありがとうございます、西山くん」
名前を覚えられていたことに驚く凜。

夏海「同じクラスの本田夏海です。初日にちよつと話したんですけど、覚えてますか？」

凜「……忘れた」

夏海「改めて、よろしく願います。西山くんのお家はこの近くなんですか？」

凜「……たまたま通っただけ」

夏海「そうだったんですね。あ、キャンディもありがとうございます」

と、手を出す。

凜、キャッチしたキャンディを夏海に渡す。

凜「……悪かった」

夏海「え？」

凜「……余計なこととしてアイツの恨み買ったかも」

と、店を出て行く。

夏海、目を丸くして西山の背中を見つめる。

すると店長・渡辺（43）が来て、

渡辺「ごめんごめん。今の銀髪の人、なんか

言ってきた？ 大丈夫？」

夏海「違います。彼は助けてくれたんです」

渡辺「（ギョツとして）ええ？」

夏海M「それから、なぜか西山くんはよくうちのコンビニに来るようになった」

○コンビニ・店内（夜・日替わり）

夏海、商品棚の確認をしている。

自動ドアが開き、音が鳴る。

夏海「いらっしやいませ」

入って来たのは凜。

雑誌コーナーへ直行して青年誌をめく

る。時計は21..41を指している。

× × ×

凜、何かを探すように菓子の棚を1周。

そしていちご味の棒付きキャンデーを

1つ持ってレジに向かう。

夏海「いらっしやいませ。お預かりします」

と、凜から商品を受け取り、スキャン。

夏海「180円になります」

凜、スマホでバーコードを表示する。

夏海、リーダーでバーコードを読み取

りながら、

夏海「このキャンデー、色んな味があるんで

すね。西山くんのオススメは何味ですか？」

凜「……」

夏海、キャンデーにテープを貼って、

夏海「良かったら今度教えてくださいね。あ

りがとうございました」

と、キャンデーを渡す。

凜、去り際に、

凜「……いちごミルク」

と、言い残して店を出る。

夏海「ちょっと意外かも」

と、口角を上げる。

渡辺「本田さん、22時になったからもう上が
っていいからね」

夏海「はい！ お先に失礼します」

○住宅街・道（夜）

人通りのない道を自転車で走る夏海。
同じく自転車で距離をとって後ろを走
る凜。

○マンション・前（夜）

自転車を降りて建物の中に入る夏海。
何も気づいていない。
凜、夏海が部屋の中に入るのを確認し
て引き返す。

○入谷高校・2年A組（授業中）

窓の外では雨が降っている。

夏海、ノートを書きながらチラッと後ろを見るが、凜、拓海、聖也、龍太郎はいない。

○西山家・外観

雨がしとしと降っている。

立派な門の一軒家。表札には【西山】と。

○同・凜の部屋

我が家のようにくつろぐ拓海、聖也、龍太郎、そして凜。漫画を読んだりランプをしたり、思い思いに過ごす。

聖也「優等生、上手くやれてっかな？」

拓海「本田さんだっけ？」

聖也「おん」

龍太郎「（ニヤニヤしながら）さては聖也。

お前ホレたな？」

聖也「ちげーし。オレギヤルしかキョーミね
ーもん」

龍太郎「優等生みたいな可愛い清楚系はタイ
プじゃないか」

聖也「でも、なーんかほっとけねーんだよ。
この間も佐藤とバトってたし。子どものは
じめてのおつかい見てる気持ちになる」

凜「……分かるわ」

と、呟く。

拓海と聖也と龍太郎「……え？」

凜「（我に返って）あ？」

龍太郎『あ？』じゃなくて。凜いま絶対テキ
トーに相槌うったろ」

と、笑う。

凜「……ああ」

聖也「おつかいと思い出したけどさ。優等生
子どもいるらしいよ」

拓海「マジで？」

聖也「龍も一緒に聞いてたよな！ 食べ盛り
の子が二人いるって！」

拓海「俺らと同一年で食べ盛りの子どもが2人いるって、普通に考えてありえないだろ」

龍太郎「でも確かに食べ盛りとは言ってたんだよ」

凜、興味ないフリをしながら三人の会話を耳を傾ける。

○同・凜の部屋（夜）

テレビゲームをしている凜、拓海、聖也、龍太郎。

龍太郎「くっそおー！また負けた。拓海家で

コソ練してるだろ」

拓海「してねえーわ」

聖也「もっかい！もっかいろ！」

凜「悪いけど俺出かけるから」

龍太郎「もしかして女？」

凜「（雑に）まーな」

聖也「くそいいなー。凜、今度合コン開

いてくれよ！」

凜「やだよめんどくせエ。自分で見つけろ」

○同・門の前（夜）

凜「じゃあな」

と、傘を差して拓海たちとは反対に歩いて行く。

拓海「そういえば、女って誰のことだ？」

龍太郎「最近できたんじゃないの？」

聖也「モテ男はいいな」

拓海、不思議そうな顔で凜の後ろ姿を見つめる。

○コンビニ・店内（夜）

凜が店内に入ってくる。

夏海「いらっしゃいませ」

と、レジから声をかける。

凜、雑誌コーナーへ直行して青年誌を読む。パズルと同じグラビアアイドル

のページ。

× × ×

凜、スマホで時間を確認、21..58。
何かを探すように菓子の棚を一周して、

いちご味の棒付きキャンディを一つ持

ってレジに向かうが、夏海はいない。

店内を見ると、夏海は掃除をしている。

渡辺「お待ちのお客様どうぞー」

と、凜から商品を受け取り、会計。

渡辺「ありがとうございますー」

凜、キャンディを持って店の外に出る。

渡辺「本田さんキリのいいところで上がってね」

夏海「はい！　ここだけやっちゃいます」

○同・店の前（夜）

バイト終わりの夏海が店から出てくる。

傘を開こうとするが雨は降っていない。

凜の声「だから違うっつってんだろ！」

店の前で凜が警察官二人に囲まれてい

る。

警察官1「いいから大人しくついて来い」

警察官2「その銀髪、オマエ入谷の西山だろ。

まったく親の面汚しが。こんな時間に何して

た？　女の子つけ回してたんだろ？」

凜「なんの話だよ！　離せよオラッ」

夏海「（駆け寄って）あの！　私のクラスメイトに何か用ですか？」

警察官1「クラスメイト！？　いや君のことだよ、コイツにストーカーされてる女の子って。匿名で通報があったんだ」

夏海「ストーカーなんてされてません！」

警察官2「庇わなくていいんだよ。コイツがやってるのは分かってるから」

夏海「違います！　彼は大事なクラスメイトです！」

警察官1「クラスメイトって……（失笑）君、コイツがどの学校か知らないだろ」

夏海「知ってます。私も同じ入谷高校の生徒です」

顔を見合わせて爆笑する警察官たち。

警察官2「嘘は良くないよ」

夏海「嘘じゃありません！　学生証も……」

と、鞆を探すが学生証はない。

夏海「学生証はまだもらえてないですけど……」

：

警察官 1 「（西山を見て）残念だったな」

と、凜を連れて行こうとする。

夏海、警察官の手を剥がして凜の手を握る。

夏海 「西山くん。行きましょう！」

凜 「いや、ちよっ：：！」

夏海、凜の手を引いて走り出す。

警察官たち 「こら！ 待ちなさい！」

と、追いかける。

○大通り・歩道（夜）

手を繋いで走る夏海と凜。

凜、繋がれた手を見つめながら走る。

○商店街・通り（夜）

警察官 1 「どこ行った！？」

警察官 1 と 2、商店街のゆるキャラが二体描かれた顔出しパネルの前を通り過ぎる。

目の穴から夏海と凜の目が覗いている。

夏海「セーフでしたね」

と、パネルから出る。

凜「……何で庇った？俺、ホントにお前の

ことストーリーカーしてたかもしんねえぞ」

夏海「へあっさり」そうなんですか？」

凜「そうなんですかって……普通イヤだろ。

犯罪だぞ。怖いんじゃないの？」

夏海「だって、西山くんは意味のないことは

しないし、理由もなく人を傷つけたりする

人じゃないと思います。もしそれが本当だ

としても、きっと理由があるはずですよ」

凜の瞳が揺れる。

凜「……警察にも目つけられてるような人間

なのに、なんでそう言えんだよ」

夏海「他の人が西山くんをどう思っていたと

しても、私にとっての西山くんは、困って

いた時に助けてくれた親切な人、ですよ！」

と、ニツコリ笑う。

凜「……（呆れて）どうかしてんだろ」

夏海「（ドヤ顔で）それに私、分かってるん

です。なんで西山くんがよくうちのコンビニに来ていたか」

凜「は？」

夏海「いちごミルク味の棒つきキャンデーを出す。」

夏海「これ。買ったんですよね？」

凜「……は？」

と、キョトンとする。

夏海「へ探偵のように」あの日、西山くん本

当はこれを買おうとしてたのに、私が預か

47

っちゃったから買えなかったんですよね。

その後もうちのコンビニに来てくれたのに、

今度はキャンデーが売り切れになってて買

えなかった。西山くんオスメのこの味、

人気みたいで、どこの店舗も入荷したらす

ぐ売れちゃうんです。でも今日たまたま一

つ残ってたので、とっておきました。この

間のお礼とお詫びです。どうぞ！」

と、自信満々に差し出す。

凜、堪えきれずブッと吹き出す。

凜「アハハハハッ。なんだよそれ。くははははっ」

今度は夏海がキョトンとする。

夏海「へ慌てて」違うんですか！？」

凜「いや：：おもしれエからもうそれでいいわ」

と、口角を上げる。

凜、夏海からキャンデイを受け取り、

凜「ありがたくもらってく」

と、帰っていく。

夏海、首を傾げて凜の後ろ姿を見る。

○マンション・本田家・リビング（夜）

夏海、テーブルの上に色付き画用紙やハサミ、のりを広げる。

夏海「あのキャンデイじゃないなら、なんでコンビニに来てたんだろう：：立ち読みのため？ それならわざわざうちの店じゃなくっていいし：：」

春樹「ねえちゃんひとりごとコワイよ：：」

夏海「ごめんごめん」

春樹「なんか作ってんの？」

夏海「学校で使う掃除の分担当作ってるの。」

春樹のクラスにもあるでしょ？　これを切

ってここに貼ってね」

春樹「オレ切るのやりたい！」

夏海「じゃあお願いしよっかな」

と、画用紙を一枚渡そうとする。

しかし、冬馬がそれを取り上げる。

冬馬「誰に押し付けられたわけ？　クラスの

やつ？　それとも教師？」

夏海「違うよ！　これは私が勝手に作ろうと

思っただけ」

冬馬「夏海はただでさえバイトとか家事で疲

れてんのに、これ以上色々抱えてどうすん

だよ！」

夏海「でもね、私昔から工作とか好きだから、

全然苦じゃないの」

春樹「ねえちゃんがりたいたって言ってんだ

からいいじゃん。かえせよー」

夏海「お願い冬馬様！」

と、ねだるように手を合わせる。

冬馬、大きくため息をついて、

冬馬「……俺も手伝う」

夏海「ありがとう！ 冬馬はこの文字切って

くれる？」

と、別の画用紙を渡す。

春樹「ほんとに冬馬もいっしょにやりたかつ

たんだあー」

と、からかう。

冬馬「……春樹は口じゃなくて手動かせ」

夏海、二人のやりとりを見て微笑む。

春樹「そういえばねえちゃん、さっきなんで

ブツブツ言ってたの？」

夏海「あー！ この前ね、タバコを買いに来

たお客さんがなかなか身分証出してくれな

いから、言い合いになったんだけど、」

冬馬「（厳しい目つきで）え？」

夏海「（慌てて）でもたまたまクラスの子が

いて、その人を追い出してくれたから何も

なかったんだけどね！」

と、付け加える。

春樹「スゲーー」

夏海「そのクラスの子、それからよくうちのコンビニに来るようになったんだけど、なんでだろうなーって。別に家が近いわけでもないのに」

冬馬「欲しいもんがあって色んなコンビニ回ってたとか？」

夏海「私もそうだと思ったんだけど、違うみたい」

春樹「ねえちゃんも冬馬も分かってなー」

夏海「春樹は分かるの？」

春樹「あったり前じゃん」

冬馬「なんだよ」

春樹「（自信満々に）かんだんだし。ねえちゃんをへんなきやくからまもるためだよ！」

冬馬「お前なあ」

冬馬は呆れるが、夏海はすんなり納得。

夏海「なるほど！」

冬馬「いやいやいや。納得すんなよ！　だつて夏海のクラスメイトってことは、そいつヤンキーだろ？　ヤンキーは人助けなんかしないから」

春樹「そんなことないし！　この前のドラマでヤンキーが女子まもってた」

冬馬「それはフィクション！」

言い合う冬馬と春樹をよそに、凜のこ
とを思い出して頬が緩む夏海。

夏海「そっか……そういうことか……！」

春樹「ねえちゃんなにわらってたんのー」

夏海「嬉しそうに」ううん。なんでもない」

○入谷高校・2年A組（授業中）

前の方では夏海に向けて授業がされて
いるが、教室内は騒がしい。
凜、いちごミルク味の棒付きキャンデ
ィを舐めながら、ジグソーパズルの最
後のピースをはめる。

凜「よし」

水着姿のグラビアアイドルの写真が完成する。

その時、チャイムが鳴り、教師が教室を出て行く。

夏海、教壇に立ち、

夏海「あの！みなさんに聞いて欲しいことがあるんです」

小林「どうした転校生」

夏海「掃除の分担表を作ってきました。一日十分で構いません。どうかみなさんの力を貸してください！お願いします」

と、頭を下げる。

小林「イヤデース」

佐藤「やりたきゃ一人でやれよ」

非協力的なクラスの様子を眺めながら、

龍太郎「あちゃー」

聖也「ちょっとかわいそーんなってきた」

と、席を立とうとすると、凜が突然立ち上がり、夏海の方へ行く。

分担表はクラスメイトが数人ずつグル

ープになり、円を回すと掃除場所が変わるようになっていた。

凜、分担当表を見て拓海たちの方に戻る。

凜「トイレ行くぞ」

龍太郎「連れション？」

聖也「ウンコなら行かねーよ？」

凜「掃除だよ掃除」

クラス全員、目が点になる。

聖也「え？」

龍太郎「掃除？」

拓海は全てを察して口角を上げる。

凜「ほら、テメェらも！自分の場所確認し

てさっさと動け！」

と、クラス全員に向けて言う。

しかし呆気にとられて誰一人動かない。

凜「おい、聞こえてんだろ。全員で掃除！」

と、クラスメイトに言い残して教室を出る。

最後の言葉で、生徒たちが次々分担当表を確認し始める。

○同・廊下

夏海、廊下に出る。

歩く凛の背中に向かって、

夏海「西山くん！」

凛が振り返る。

夏海「ありがとうございます！　掃除のこ

とも、それからコンビニの帰り道も！　ま

たいつでも買いに来てくださいね！」

凛「これでこの間の仮は返したからな、夏

海！」

と、歩いて行く。

拓海、聖也、龍太郎が教室の扉から顔

を覗かせて、

龍太郎「凛が優等生のこと名前で呼んだ……」

聖也「自分が認めたヤツ以外キョーミねーの

に……」

拓海「へ嬉しそうに」つまり、そういうこと

だな」

夏海、満面の笑顔で凛の背中を見つめ

る。

（了）